

ぼくの優しいじいじ

大栗 世風

パシッ。

しようぎのこまを盤に置く。ぼくの楽しみな時間だ。相手はいつも大好きな祖父だ。祖父はぼくたちに底ぬけに優しい。

例えば、送り迎え。ぼくのうちは学校が遠い。歩いて一時間はかかる。兄弟三人別々の習い事をしているから、送り迎えの時間もみんなまちまちだ。なのに嫌な顔一つせず毎日来てくれる。ぼくのバスケットが長引いても待っていてくれる。祖父がいてくれると安心だ。母に怒られている時、助け船を出してくれる。祖父が間に入ってくれれば、母の怒りも早く収まる。突然の友達との予定や無理なお願ひも、祖父なら聞いてくれる。だから母に見つからないように、こっそりお願ひをする。

でも優しいだけじゃなくて、危ないことをしたり、約束を守らなかつたりすると怒る。すぐ怒る。ぼくは耳が悪い。小さい時から聞こえにくい。父と母は仕事だから、病院には祖父と行く。薬を飲まなかつたり、病院からやつてはいけなと言われていることをしたりすると本気で怒る。でも、ぼくが反省しやすいようにおどけてみせてくれる。少し気まずい頃は、それに怒る。祖父はすごい。

それから、祖父は習字の達人だ。何て書いてあるかさっぱり分からない、へびがはったよ

うな字を書いてる。きつとうまいんだろう。そんなほくにも分かるのは、ほくの習字のお手本だ。ぼくは習字を祖父に習っていて、祖父のお手本を見て書くとお上手に書ける。祖母の還暦のお祝いや、ひいばあちゃん卒寿のお祝いも、ぼくが習字で「おめでとう」と書いた。みんなすごく喜んでくれた。二人とも今でもかざってくれている。

そして何より楽しい祖父との時間は、やっぱり二人でしようぎをする時。ぼくが小さかった時は手をぬいて負けてくれていた。でもぼくが、しようぎクラブに入って強くなった。すると、ぼくが勝つ日が続いた。その時ぼくは見た。スマホでこっそりしようぎの練習をしているところを。かわいいやつだと思ってることにした。そしてぼくは、対等に戦えるようになってきて、ますます祖父とのしようぎが好きになった。この前の勝負で、王を取ろうと飛車を動かし、パシッとさした。ぼくは、置いたしゅん間、

「あ！ ちよつと待って。」

角に取られることに、気が付いたのだ。

「ダメダメ、もうあかん。」

祖父は待ってくれなかった。前は待ってくれたのに、ぼくが強くなったのかな。今は対戦表を作って勝ち負けを記録している。

そんな祖父に「ありがとう」でいっぱいだ。遊んでもらったり送り迎えをしてもらったり、当たり前のように思っていた。本当はぼくを大切に思ってくれているからだ。これからは習字をがんばったり約束を守ったり行動で見せる。少してれくさくて言えないけど、お迎えの車で二人になれた時に言おうと思おう。

「じいじ、いつもありがとう。」